

ある対照的な2人の青年の独特なありようについて

大倉得史 Tokushi Okura

京都大学大学院人間・環境学研究科

Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

要約

従来膨大な量のアイデンティティ研究がなされてきたが、そこにおいては(1)「アイデンティティとはそもそも何であるか」が未だはっきりとはしていない、(2)現代を生きる青年たちが、実際どのようにアイデンティティ問題をくぐり抜けているのかが今一つ見えてこない、という問題がある。そこで本研究では、現代の青年と一対一で語らう「語り合い」という新たな方法を用いて、対照的な2人の青年の独特なありようを詳細に描き出し、彼らのありようの違いが一体何によるものなのかを考察する中で、アイデンティティとは何なのかを考えていくための手掛かりを模索した。その結果、〈自己-世界体系〉を「問う」態度とそれに「基づく」態度といった概念が生き生きとした事象から抽出され、本研究は彼らのありようの本質的な相違とは、この二つの態度の相違によるものであると結論づけた。さらにこの二つの態度の相違は彼らの「欲望」の相違なのではないか、アイデンティティを探し求めそれを見出していくという直線的な図式で良いのかといった疑問を提起し、アイデンティティとは何なのかを考えていく際の重要な問題点を呈示した。

キーワード 青年期, アイデンティティ, 生き生きとした事象

Title

Description and analysis of various ways of being in adolescence.

Abstract

Although a great number of studies on identity have been conducted, two problems still remain: (1) The question "What is identity in itself?" has not been answered clearly yet, and (2) These studies have not described how adolescents in present society actually form their identities. This study described the "ways of being" of two adolescents in detail, using a new method—"In-Depth Talking", and analyzed the actualities in which they live to find what their different "ways of being" are dependent on. As a result, it was concluded that two basic attitudes characterized the adolescents' "ways of being", namely questioning one's "Self-World System" or basing oneself on it. In Opposition to the clear-cut view of identity as being sought after and found by adolescents, both attitudes are discussed here as resulting from the adolescents' differing desires, thus calling for a reconsideration of an important question in identity research, the question of "What is identity in itself?".

Key words

adolescence, identity, actuality

問題・目的・方法論

青年期に生じる重要な問題として、アイデンティティの問題があるということがエリクソンによって指摘されて以降（Erikson, 1950/1977, 1959/1973, 1968/1969）、これまで膨大な量のアイデンティティ研究が行われてきた（鏞・山本・宮下, 1984）。ここではアイデンティティ尺度（遠藤ら, 1981；宮下, 1987；Rasmussen, 1964；砂田, 1979 など）や半構造化面接（Marcia, 1966）といった統計的手法が開発され、エリクソンの記述の妥当性が実証的な観点から検討されたり、臨床場面においていわゆる「アイデンティティ拡散」症状を呈していた青年の心理力動が究明されたり（一丸, 1975；鏞, 1974 など）と、実にさまざまな試みがなされてきた。しかし、アイデンティティという概念がすっかり定着し、統計的な手法の整備などによってアイデンティティ研究が行いやすくなった今、エリクソンの言わんとするところを深く汲み取ろうとする努力や、先行研究の流れの中に有効な位置づけを与えることをしないままに、この語を乱用したり、無理な操作的定義を行ったりする研究が増えてきた（鏞・山本・宮下, 同上）。言わばアイデンティティという概念が「一人歩き」を始め、それが一体何を指すのかも曖昧なままに、さかんに「アイデンティティ研究」が行われている感がなくもないのである。

実際これだけ多くのアイデンティティ研究を読み込んでみても、現代を生きる青年たちがどのようにしてアイデンティティ問題をくぐり抜けているのか、そもそもアイデンティティとは何なのかということが意外なほど見えてこない。「アイデンティティ達成」や「アイデンティティ拡散」、「基本的信頼感」（谷, 1998）や「時間的展望」（都筑, 1994）といった概念が詳細に議論されてはいるが、その一方で現代の青年の実像がなかなかイメージできないのである。もちろん、そうした実証的試みを否定するわけではないのだが、それらは今の青年の姿を生き生きとした形で描き出すような「質的研究」とともにあってこそ、初めて「分かる」ものになるのではないだろうか。そうした意味において現在のアイデンティティ研究には、（臨

床場面には赴かない青年も含めて）さまざまな青年の姿を詳細に描き出すような方法と、そこでのデータに基づいて「アイデンティティとはそもそも何なのか」をもう一度問い直していくような議論とが同時に求められていると言えるだろう。

そこで本研究においては、新たに「語り合い」という方法を用いて、現代を生きる青年の実像をできる限り詳細に描き出し、同時に「アイデンティティとはそもそも何なのか」を解明することをにらみながら、そのために有効となるだろう概念を事例に即して導き出すことを試みる。

*

「語り合い」という方法は、平たく言えば今を生きる青年たちと一対一で語り合い、それを通して彼らがどんなアイデンティティ問題のくぐり抜け方をしているのかを探っていこうとする方法である。アイデンティティについての調査ということと、あとは何でも思いつくまま自由に会話してほしいという教示を与える以外は、一切の構造化を行わない。というのも、アイデンティティとは何であるかを始めに定義してかかる多くの先行研究と違って、本研究では研究者側が持ち出す枠組みはできる限りゆるやかなままに留め、むしろ事象からのボトムアップによってその枠組み自体を見直していこうとするからである。

さらに「語り合い」は、一般によく行われてきた聞き取り調査などともかなり異質だと思われる。聞き取り調査の場合、聞き手と話し手がかなり明確に役割分けされると同時に、話し手が語った言葉だけが呈示され、それをできる限り「客観的」に分析することが目指される。ところが実際は、語られた言葉の意味というのはそもそも聞き手、話し手双方が抱える価値観や世界観、常識、語彙体系、社会的文化的背景、これまでの経験、さらには両者の関係性やその場における雰囲気、文脈、それが語られる調子やトーン、そこに交えられる身ぶりや表情といったありとあらゆるものの上に、一つのゲシュタルト的なまとまりとして「感受」されるものだと考えられる。一見「客観的」に見える語られた言葉のみの呈示、分析であるが、実はそれはそうした諸々の前提条件に大きく左右されるもの

であり、研究者というフィルターを通してしか事象に触れることができない読み手の側にとってみれば、むしろ呈示してほしいのはそれらの前提条件それ自体だということになる。語りの意味が本当に読者に通じ、またそこで生み出された理論が妥当なものであるかが読者に判断できるためには、実はそうした前提条件及び研究者に「感受」されたものこそが積極的に呈示されなければならないのである。

「語り合い」で目指されるのは、静的な「聞き手-話し手」関係に基づく、言葉の「一般的客観的意味」の分析だというよりは、むしろ聞き手と話し手が相互に入れ替わりながら両者の「主観」がぶつかり合うことで生まれてくる、固有の関係性に基づいた言葉の「私的意味」の分析である。そこでは研究者の「主観」が積極的に呈示され、語られた言葉と併せてそれこそがもう一つの分析対象となる。平たく言えば、何がどういうふうに通じられたか、そこで何が感じられたのかがまず呈示されると同時に、それがそのように感じられたのは、研究者自身のいかなる体験、いかなる暗黙の前提によるのかを考察していくことで、協力者のあり方を逆照射していくのである。

*

以上のような問題意識、目的、方法論に基づいて、本研究では極めて対照的なあり方をしている2人の青年を取り上げる。彼らはマーシャのアイデンティティ・ステータスで言えば、それぞれ「アイデンティティ拡散型」と「予定アイデンティティ型」だと見てほぼ間違いないと思われるが (Marcia, 同上)⁽¹⁾、本研究は青年をタイプ分けすることに主眼があるのではなく、むしろ彼らを比較対照することで両者のありようの何が、どのように違うのか、なぜ違うのかといったことを考察し、「アイデンティティとはそもそも何なのか」を考えるための手掛かりを見出すことを目的としている。特に従来「見せかけの自信」だとか「両親の価値観が通用しない状況におかれたならば、たちまち途方にくれるだろう」などといった、かなり辛辣な評価を受けてきた予定アイデンティティ型 (鐘・山本・宮下, 同上) については、その「強さ」に焦点を合わせて論じることで、従来の評価を見直す可能性を

開こうとする意図があることを、あらかじめ断っておこう。

方法

上に述べた「語り合い」法。協力者は調査者が日頃から親しくしていた2人の友人 (名前は仮名。年齢、身分は調査開始当時のもの)。

須賀友哉 (男。23才。大学4年生)

川田 智 (男。21才。大学2年生)

調査期間は1997年10月から1999年12月にかけての約2年間。一人につき10回程度の「語り合い」を行った。場所は調査者、協力者双方の自宅や研究室などで、一対一で落ちついて話せる雰囲気を作った。時間は「話す気が持続するだけ」という感じで、45分から3時間ぐらいの間、特に決めなかった。会話は了解をもらった上でテープレコーダーで録音し、分析はその録音とそれを文字化したものによって当時の雰囲気を思い起こしながら行った。友人ということで日頃からある程度の信頼関係はできており、お互い率直に話せる雰囲気は十分にあったと考えられる。

結果・考察

【事例1】須賀の場合

1) 須賀との出会い

私⁽²⁾が須賀に「語り合い」を依頼したのは、私も彼も同じ大学4年生だった年の秋頃だった。彼とは2年生のとき大学のサークルで知り合ってから、同じ目標に向けて努力したり、それ以外にも事あるごとに一緒に行動したりと、気の置けないつき合いをさせてもらってきた。私にとっては、必ずしも勉学に励んだとは言えない大学生活の中で、唯一自分なりに一生懸命やったと思えるのはサークルの活動だったし、共に飲

んだり、話し込んだり、ボーっとしたりするのも、毎日のように顔を合わせるサークルの連中とが一番多かった。そして、そうした事情は彼にとっても大きくは違わないはずだった。

彼はサークルの中でも中心的存在で、仲間どうして集まったときなどは、彼がそこにいるだけでその場全体が何か明るくなり、笑いが起こったり、話が弾んだりし始めることがしばしばあった。またサークルの運営などについて皆の意見が衝突したときには、どちらかの側に加担して議論を白熱させるというよりは、各自の意見をしばらく黙って聞いた上で、「それも分かるけど、これも分かるよ」といった感じの発言をし、皆の頭をずっと冷ましてくれるようなことも多かった。そんなどっちつかずの意見は、ときどき一部の仲間から「はっきりしろ」といった反論を食らうこともあったけれど、しかし、たいていの者には「そういう見方もあるな」と思わせてしまうような不思議な「大きさ」、人の心をさっと解きほぐしてしまうような不思議な魅力が、彼にはあった。

そんなふうに、ある意味頼りがいのある彼だったが、彼自身は決して「しっかりした奴」ではなかった。サークルの集合時間や、遊びのときの約束の時間に寝坊などで遅刻するのは当たり前だったし、大学の授業にもほとんど出ずに、毎日遊びほうけていた。私のいたサークルには、「授業ブッチして（サボって）一人前」とでもいうような不思議な雰囲気があったから、皆多かれ少なかれ「ブッチ」していたのだが、彼の場合それは大変徹底していた。あまり授業に出ないと言っても、そこはいわゆる「一流大学」にまで入ってきた者の要領の良さとも言うべきものがある。テスト前には集中力を発揮して、単位だけは何とかそろえるという者が多かったのだが、彼は違っていた。他の者がテスト前に慌てているのを見てか見ないでか、ともかくまったくテスト勉強をせずに、「確実に」単位を落としていった。そうやって必要単位もそろえぬまま迎えた4回生だったのだが、本人は『(卒業は)6年計画』などと本気とも冗談ともつかぬことを言いながら、やっぱり今までと同じような生活を続けているようだった。「須賀はどうするんだろう？」という心配と好奇心の入り交じった周囲の関心をよそに、はたから見れば何とものんきな生活を続ける彼には、こ

でも妙な大物感が漂っていた。

私が彼に「語り合い」を依頼したのは、彼のそんな不思議な魅力にどこかで惹きつけられてのことだったのかもしれない。また、私にとってサークルの中でも彼は最も話しやすい仲間の一人であり、これまでに何度も色々なことについて語り合ったり、議論してきたということもあった。さらに、うれしいことには、彼の方でも私が本当のところ何を考えているのかということに、常々興味を引かれるところがあったようだ。そんな両者の思いが何となく響き合ったからだろうか、彼は「アイデンティティの調査で、話を聞かせてほしい」という私の依頼を快諾してくれた。こうして彼の「語り合い」が始まったのである。

2) 「語り合い」の始まり

語り1 須賀(4回生 秋)～ふらふらした自分～

(一通り調査の主旨と方法を理解してもらってから「まあ、まずやってみようか」という感じでテープレコーダーのスイッチを押す)

私 まずアイデンティティについて思うところを語ってほしいんだけど。

須賀 俺がどうしてこんな人間になったかということ？

私 うん、まず自分がどんな人間かということから。

須賀 …ふらふらしてるというか、これだというのがない人間。なんにしても。あらゆることに疑問を感じて、それでいて自分は何もしない人間。しかも、それについて突き詰めて一人で考えるかということそうじゃない。みんなの方に、楽しい方にワーツとなる。

わりと自分ができるというか、考えられるというか、そういう人間だと思ってるんだけど、それに自信が持てないというか、みんなにそう思われたいという…。

「語り合い」では、私の方で何か決まった質問を準備しておくわけではない。この方法はまったくの手探りで始まったものであり、一体どうなるのか、うまく行くのだろうかといった一抹の不安もあったのだが、上のように彼は比較的すんなりと「語り合い」に乗ってきてくれた。傍らではテープレコーダーが回ってい

るにも関わらず、それほど緊張も見せず、飾らない言葉をポンポンと軽快に継ぎ足していくあたり、普段の彼と何も変わることがなかったと言って良いだろう。

ここにある通り、彼は『ふらふらした人間』として自分を規定するところから始めた。「自分はどんな人間か」などといった大変漠然としたテーマに対して、彼がまずそこから語り始めたというのは、この「ふらふらさ」こそが彼にとって一番素朴な自己観であり、同時に一番の問題だったということなのだろう。彼の言う「ふらふらさ」とは一体どういうものなのだろうか？

それから彼は、これまで自分が通ってきた道を話し始めた。

*

彼は地方都市のごく平均的な家庭で生まれ育った。小さい頃は、いわゆる『いい子』だったという。小学生のときはそうやって何も考えずに、楽しく過ごしていたのだが、『あるときただの「いい子」では面白くないな』と思い出し、『どこまでやったら親は怒るかな』と『ちょっとした冒険』をするようになった。もちろんそれは、夜遅く帰ったり、校則違反のズボンをはいたり、今考えると実にかわいいものだったし、親からも『こっぴどく怒られるということはなかった』。ただ、高校のときに、何日か夜遅くまで外出を続けたことがあり、寝ずに自分を待っていてくれる親の姿を見て、『親に悪いな』と思い出したのだという。それからは、『いろんな悪いことをしなくなった』。

高校は一応進学校だったが、成績は下から数えて何番目というぐらい悪かった。一度留年しそうなこともあり、さすがにそのときには親も『それはやばい』と言ったが、それ以外はほとんど何も言わない親だったという。『浪人するよ』とかねてから公言していた通り、一浪することになったのだが、そこで『なんで大学に行くのか』と考えた。親には『可能性が広がるから』と言われ、自分としても他に何もなかったから、『ああ、そうか』と思って難関と呼ばれる今の大学に入ってきた。

そうした彼の進路決定を裏から支えていたのは、中学、高校を通していつのまにか染みついてきた『エリ

ート』志向だったのだという。『いい大学、いい企業』を経て、『金をもらうことがいいことだという基準があったのかな？』と彼は言う。もう一つ彼にとって重要なことは『女の子にもてたい』ということだったが、『好きだった子がたまたま賢かった』ということも手伝って、『さらなるネームバリュー』『もてるエリート』を目指して今の大学に入ってきた。

ところが、大学に入学後、彼のものの見方は大きく変わる。まず、『お金もらっている人というのは、それなりの仕事をしているんだ』ということに気づく——『親父とかしんどそうなものを見ているじゃない？仕事か。考えたら、それは俺には楽しくないんだよね』。同じ頃、彼はある政治団体と関わりを持つようになり、そこから現代の資本主義社会に対する批判的な見方を取り込む。すなわち、就職しても『自分のために働けない』。自分が一生懸命働いてもそれは資本家たる『社長のため』にしかならず、むしろ自分は企業の悪しき競争原理に組み込まれ一歯車にされるだけだと感じる。今まで漠然と目指していた『エリート』は今やまったく魅力のないもの、いや、むしろ社会的弱者から利益を『吸い上げる』悪しき存在として、彼の一番の攻撃対象になってしまう。

そうやって目指すべきものを失った彼は、何になるかと考える。『どうしようと考えたのが、一つは俺のためと思える仕事をするということ』だったが、それも『あんまりぱつと浮かばなかった』。唯一浮上してきたのは、仕事以外の『暇』が多そうな高校教師という選択肢だったが、それも『やっぱりそれになりたいわけじゃなくて、妥協案なんだよ』。『どうしてもなりたくないわけじゃないから、前に進めない』。

*

こうして、結局今の自分にはなりたくないもの、やりたくないことがないのだということと、そこに至るまでの経過を彼は詳しく語ってくれた。

日頃からある程度彼のものの見方には触れてきた私だったが、彼が自分の生き方をこうした一つの筋で語るということはこれまでなかったし、そうした背景があつてこそそのあの日常生活だったのかと少し納得できたような気もして、何だかとても新鮮な感じがした。

私自身もときには自己開示しながら、彼の語りを興味深く聞いていたのだが、彼もまた自分の生き方を一つの筋で人に伝えるという珍しい試みを楽しんでいるようだった。要するに、私たちは共にかなり「ノッて」いたのである。

「アイデンティティ」の調査としての「語り合い」が、まさにそれとして進み始めたような感じとも言うのだろうか。今まさにアイデンティティを模索しつつある彼自身の関心と、同世代にありやほり自らのアイデンティティを問うている私、さらには研究者としての私の関心が響き合っているかのようには話はどんどん進んだ。慣れない調査への当初の不安はどこへやら、まさしくアイデンティティ問題について語り合っている、そんな感覚が私の中で芽生え始めていた。

3) 私自身の体験とともに

私にとって、彼の語りが上のように捉えられた背景には、私自身のかつての体験がある。まずは彼が今の自分の心的風景をふと比喩的に表現した次の語りを見ておこう。

語り2 須賀(4回生 冬)～大草原の真ん中で～

(最近、毎日どんなことを考えるかという話の流れで)

須賀 でね、最近俺はやっぱあれなのかなって、やっとなんか最近俺は(考えること、めんどろなことから)逃げてるんだなっていうことを実感して来てさ。実感ていうか、ああ逃げてるんだな、だろうな、逃げてんだろなっていうのは、「ああそうだな」って思うんだけどさ……。うん、選択の幅が広がりすぎちゃったのかな。今までこう狭い道であったのが、急にぼんと、大学入ったからじゃないよ、大学入って色々、今までレールに乗ってたっていうのに気づいたから、レールを降りてみようと思って降りた瞬間に、大草原にポツンと。今、大草原のまん中で立ち止まってるんだけど、「あっち行ったら何かあるのかな」って、で、こう方向だけぐるぐる回っちゃってさ、「こりゃ進まない」ってんで……。で、今確実に立ち止まってるっていうのは気づいたんだけど、どこに向かって…なんて言うか、パワーを使ったらいいか…どこに向かおう…。

私には彼ととても似たような経験があった。大学受験に失敗して浪人生活を送っていた頃だった。私もまた「何のために大学へ？」というよくある疑問を抱き、一旦は『レール』を降りてみた一人だったのである。受験勉強を中断して、「自分は何になろうか」ということをずっと考えていた——大学に行くのか？ 行くとしたらこの大学の何学部に入るのか？ そして、将来何になっていくのか？ あるいは、大学に行かないのか？ だとしたら、どういった職に就くのか？ 結局自分はどういった生き方をしていくのか？ 何を喜びとし、何を励みとして生きていくのか？ 何を信じ、何に価値を見出していくのか？ そもそも自分がこの世界に生まれ落ちたというのは、どういうことであり、一体何のためなのか？

問いは自己増殖的に増大し、かつどんどん大きく、難しく、根本的になっていった。そして、そうなればなるほど答えはまったく見えなくなっていった。何も決められないまま、まさに『大草原のまん中』に立ち止まっているような感じだった。

周囲に目にするどの職業も、どの生き方も、それなりに魅力的ではあると思った。けれども、どの一つも自分のものとして選択するには、何か物足りなかった。須賀と同じように、競争社会の中で疲弊していくというのは最も避けたい生き方だった。しかし、ではどうするのか？ ——進むべき道さえ決まれば『パワー』はあるのに、という思いも空しくそれがまったく見えなかった。

そうした終わりのない問いの渦の中で、早く自分の進路を決定しなければならないと、気ばかりが焦る。それは非常に苦しい状態だったし、結局はこんなことを考えていても意味がない、とりあえず大学に入ってしまうという『妥協案』で、何とか自分を奮い立たせたのだった。

*

こうした私自身のかつての体験——私自身のアイデンティティ混乱体験と言って良いだろう——が、「アイデンティティ研究」をするようになった今でも、私の中で「アイデンティティ問題と言え、まずこれ」とでも言うべき基本軸になっていることは否定できない

い。例えば上のような須賀の語りを聞きつつ私の中に呼び起こされてきたのも、やはりそうしたかつての体験だったし、また、実際彼の『ルール』批判というのが私にとってかなり親和的なものだったこともあり、私には彼の言っていることが、とても「よく分かる」ような気がしたのである。そして、恐らくはそうしたスタンスで私が耳を傾けていたことが、互いに「ノッて」いる雰囲気を生み出すのに一役買っていたのだろう。

4) 批判

概ねそんな感じで、語り合いは続いていった。

彼は『働くことに意義を感じない』と言った。大学入学以前は、大学さえ卒業すれば『年収何千万という安易な』考えしか持っていなかったのだという。けれども、実際は多くの人がそれこそ懸命に働いて、やっと生活していけるぐらいの給料をもらっているというのが現実である。彼自身は、お金をもらうためにそこまでするのは嫌なのだという。

大学を4年で卒業していく。就職する。時間外労働、休日出勤は当たり前。自分のしたいこともできず、ただただ会社の利益のために奉仕させられる。そして、給料はあまり大したことはない。彼の中では、就職はそんなイメージで思い描かれていた。そして、そうした大きな流れに巻き込まれていく大多数の人たちというのは、『まあ怒りを感じてるとは思うんだけど、でも、もう辞めることはできないじゃない?』という言葉に表れているように、彼にとっては「働かされている」存在、言葉を悪くすればどこか「騙されている」存在だった。

その一方で、『生きていくためには働かなければならない』という当たり前の事実が彼を苦しめていた。『生きていくのは俺のためなんだけど、働くっていうのは俺のためじゃない』という『矛盾』した感覚が、彼を支配していた。私が「食っていくだけのお金を稼がせていただく」とは考えられないかと提案すると、彼は実際問題『食ってだけでいいからその分働かせてくださいというのができるか?』と反論し、『そういう意味でまあ教師かということになるんだけどね』と言った。

企業への就職は、会社の一歯車にされてしまうこと、

厳しい競争原理によって弱者を踏み台にして生き延びることであり、彼にとってはまったく考えられない選択肢になっているようだった。それに対して教師というのは、そうした悪しき社会的風潮に異議を唱えられるような可能性、『俺のように考える人間』、そう簡単には騙されないような人間を『作る』可能性を有している。また、高校時代野球部だった経験を活かして、顧問で野球を教えるというのも面白そうな気がするという。そうした活動をしながらか、子どもたちに何かしらの影響を与えていくという方向性。

けれども、そこで踏みきれない。『影響を与えたいっていうのはあるんだけどね、だけど、そこでまた考えるのは、影響を、俺、何のために影響を与えるんかになって』。何か自分の中で許せないこととなり、伝えたいことなりがあれば、教師になるというのは一つの有力な方向性だろう。けれど、『俺は何が今不満なんだろうっていうのが、まあ、はっきりしていない』のだという。現代社会の悪しき点を指摘し、正していくということも、彼の職業選択の動機としては不十分なようだった。他にそうした職業としてジャーナリストや国連職員といったものもあるが、と私が言っても、彼はまったく興味を示さなかった。

というより、むしろ今度はそれらに対して批判の矛先を向けるというのが、彼の特徴だった。例えば、教師になって野球を教えたいと言った次には、日の丸を掲げたり、監督の言うことには絶対逆らえなかったりとどこか『軍国主義』的などころのある今の学生野球、あるいはそもそも野球という競技が持つ競争の側面を批判した。国連は平和維持活動と称して、湾岸戦争で『爆弾ボコボコ落とした』点をやり玉に挙げられた。結局そういった形で、ありとあらゆる選択肢を批判し却下しつつ、やはり『生きていくためには働かなければならない』と同じところに舞い戻っていく、それが彼だったのである。

*

私にとっても、彼の批判の一つ一つは確かにうなずける部分が多かった。ときに明らかに行き過ぎる企業の競争原理。就職してからの厳しい労働条件。ときに危険な仕方で美化されている学生野球。国連の「平和

維持活動」の危うさ。少なくとも私には、それらは確かに絶えず視野にだけは入れておかねばならない諸問題のように思われた。

しかし、である。そうした問題があるから就職できない、とでも言わんばかりの彼の論理、そこだけがどうしても今の私には分からなかった。今の社会や、自分が就こうとしている職業に問題点があるならば、少なくとも自分はそれに巻き込まれないような形で、あるいは自らがそれを改善していくような形でそこへ参入していくというのは、難しいが決してできない話ではない。企業にだって色々あるし、仕事に対してだって色々なスタンスを取り得る。教師にだって色々あるし、野球の仕方にも色々ある。にも関わらず、彼においてはそれらの悪しき点ばかりが強調され、かなり一面的に捉えられているという印象を受けたのだ。

上で、そうした彼のものの見方は、「今の私には分からない」という表現を使った。けれど、かつてあの体験をくぐり抜けていた頃は、私にもちょうど彼と同じような感じであらゆるものが見えていたことを告白したい。すなわち、この社会、この世界のあらゆるものに善悪両面があり、どれを選んでも自分がその「悪」の側面に加担することになるのではという不安がぬぐい去れない。「大人」になるため、この『矛盾』多き社会に自ら巻き込まれていこうとするとともに、自らの正当性を一体何によって保証していったら良いのか。結局かつての私には、『矛盾』多き社会の一員となりつつ、それでも「自分は間違っていない」と言い切るだけの信念とも開き直りとも呼べるようなもの、言うなれば「自分」に対する最低限度の自信のようなものがなかったのだと思う。

あれ以来私の世界観がそう大きく変わったわけではないし、今もそれほど自分に自信があるわけでもない。けれど当時、何も決められない苦しみも頂点に達し、一体いつまでこんなことを続けるのか、結局自分は「考えている」と称して受験勉強から逃げているだけではないのかということが心底実感されたあのとき、私の中で惨めでちっぽけな「自分」が鮮明なイメージとして浮かび上がり、それまで探し求めていた「完全な選択」でなく『妥協案』で良いから、とにかく行動しなければという衝動が押し寄せたのを忘れることはできない。「自分」の手掛かりを求めて暗中模索する

中で、例え惨めでちっぽけであっても、あの「自分」に出会えたことがバネとなって、その後私は自信を再び取り戻すべく、とにかく行動できるようになったのだった。

*

須賀の社会批判は極めて論理的で、なるほどと思える部分も多い。けれどその一方で、そうした批判を踏まえて彼自身がどうするのかということがなかなか伝わってこない。言うなれば、どこか宙に浮いた、批判のための批判になっているようなところがある。もちろんそれは、彼自身自分がどうしたいのかが分かっておらず、自分のやる気をかきたてるようなものがないこの社会に対する不満を訴え続けるしかないということに起因するものだろう。しかし、そこからもう少し踏み込んでみると、実はその背後に、『矛盾』多き社会に巻き込まれたときにはや「自分」の正当性を維持できなくなるのではないかという不安感、あるいは例え『教師』になったとしても自分は「良い影響」を与えられるほどの人間なのかといった無力感が響いていることが見えてくる。つまり、「自分」に対する根本的な自信のなさが彼の行動を止めていて、ただでさえ八方塞がりな今の状況をより根深い閉塞感で包んでいたのである。

5) 価値 規範の崩壊

最初はアイデンティティ問題にうまいこと踏み込めたという感覚も手伝って、「よく分かる」というスタンスで聞いていた彼の語りに対して、上のように私は次第に距離を取り始めた。あれはダメだし、これもダメだ、でも生きるためには働かなければならない、と同じところをめぐる彼に対して、私は「分かるよ」とも「分からないよ」とも言えない微妙な立場を取るようになっていったのである。

私はしばしば、「そんなに物事の悪い面ばかり見なくても」といった方向で発言したり、世の中にはもっと色々な職業があるんだということを言おうとしたりせずにはおれなかった。それに対して彼は私のことを『穏和』だと言い、その職業はかくかくの理由でダメなのだと説明した。その理由はとときにとても鋭い視点

からのものだったりすることもあって、正直最初のうちどこかにあった「私の方が成熟している」というような感覚は、容易に崩れ去っていた。彼の『6 カ年計画』の背後には、そうした周到な論理が隠されていたのである。

『なんで4年で出なあかんのか、そう考えるとさ、そうすると出なきやいけない理由がなくなっちゃって』と彼は言った。一見「善」と思われているようなものも含めて、あらゆるものを疑問のふるいにかける彼である。「卒業しなければならない」という常識的規範もその疑問にさらされていた。なんで卒業しなければならないのか。私の場合そうした疑問が生じたことはなかったのだが、考えてみれば答えがなかなか見つけにくい。一つあるとすれば「親の手前」ということだろうし、彼も『大金出して大学入れてもらった』親のことを気にかけることはあったが、それすらもやはり自分が卒業する動機としては不十分なようだった。そんな彼の世界から私は距離を取った。取らねばならなかった。

なぜと訊かれたら答えることはできないけれど、でも生活していくためには「理由無し」で従っておくほかない規範や倫理というのがある。「卒業しなければならない」はかなりそれに近いし、『生きるためには働かなければならない』という先の命題はまさにその最たる例だろう。

一応は『生きるために働かなければならない』という大前提に絶えず回帰しつつも、須賀の疑問の立て方は、そうしたある意味触れてはならないような規範や倫理をも相対化してしまいかねないほどの勢いを持っていた。実際彼は『今、こうね、規範、何を拠り所にして、何をもち、何を信じて生きて行ったらいいのかっていうがね、全部崩れてる。今まで生きてきた価値観というのが、全部崩れてる段階なんだよ』と言った。ありとあらゆる規範や価値観が相対化されてしまい、『生きるためには働かなければならない』という大前提だけが、かろうじてその絶対性を保っているような感じ。あるいは、その大前提すらも彼の行動を引き起こすほどまでには、効力を持っていないような感じ。

それでも彼は信頼できる価値観や規範を見出すためにこそ、問いを発し続けていた。恐らく今の「自分」

に自信が持てないがゆえに、自分の正当性の拠り所となるものをより強く求めていたのだろう。しかし一方では、あらゆる規範や価値観の「理由」を問うことで、ますますそれらの信頼性が怪しくなっていく。そんな逆説の中にあつた彼の語りからは、日頃の明るい言動とは対照的に、ある種の悲壮感すら漂っていた。

6) 自分の意味

こうして彼と語り合ううちに、実は彼がとても苦しい思いをしているのではないかという印象が徐々に確固たるものになっていった。仲間との議論におけるどっちつかずの意見というのは、従うべき規範だとか価値観だとかを確定し得ず、それゆえ自信を持って一つの意見を押し出していけない今の彼のあり方の裏面であるということ、卒業延期にしても、順調に卒業し就職していくことに意義（見出したくても）見出せないという苦渋の選択だということが、次第に明らかになっていったのである。ときおり自分が一つの意見や世間の常識的な価値・規範に縛られないということに、一種の優越感のようなものを漂わせることもあったが、やはりそれはすぐに、何もしておらず何も言えないという自信のなさを取って代わられるのだった。

語り3 須賀(4回生 秋)～無意味な「俺」～

須賀 何を考えても中途半端なんだよな、俺は、多分。中途半端、中途半端なんだよ、何を考えても。でもね、中途半端って、それはいいとか悪いとかじゃなくて、中途半端にならざるを得ないんじゃないかっていう…なんて言うかね、こういう考えをしてたらっていうかさ、中途半端にならざるを得ないんじゃないかねって、何となく分らんかね？

私 もうちょっと具体的に…。

須賀 具体的にか、ちょっとうまく言えないんだけど、中途半端を肯定するわけじゃない、それでいいんだっていうわけじゃないんだよ。けどね、それは野球の話でもさ、まずもって複雑なわけじゃない？

私 何が？

須賀 その、そもそも野球っていうのは何なのかって考え出したりするとき、何だろうって、分かりっこないやん。野球って何なのかって言ったら分かんないでしょう？

私 うん。

須賀	野球っていうのは、野球じゃない？ そこがこう、固定しないから、こう、方向をつけたときに、こう廻っていくと、なんて言うかな、廻り切れない？
私	ああ、うん。
須賀	というのかさ、野球の話で言ったらそうなんだ…教師というのは何なのか…まあ、俺っていうのが何なのかっていう話なんかな。俺っていうのは何なのかっていうのは、もう俺以外の何者でもなくてさ、確定しないっていうかさ…俺っていうのは俺だっていう、そこに意味もくそもないんだよね。ないことない？…ないっていうかさ…俺っていうのは俺なんだっていうのに、それ以上の意味はないとかさ…それ以上に意味はなくてさ…そのことに意味があるかって言ったら、ないっていうかさ…ないんじゃないかなあと…
私	その「俺は俺だ」という「俺」は、つまり「非常に不安定で」ってこと？
須賀	というか、ここにこうして在るっていう俺…なんて言うかな…それ、ちょっと良く分かんないんだけど、うまく言えないとか…良く分かんないんだけど…
私	こういうふうに言ったらどうかな、「俺って不安定やけども「俺は俺だ」っていうところで、かろうじて「俺である」っていうのを保ってる」というか…
須賀	ああ、そうだね。そっちの方が合ってるね。うん、ああそうか、そうか…。…いろんな矛盾を受け入れられないのかな。
私	受け入れられない？
須賀	受け入れられないっていうか、自分をさ、もう自分があるもんだと思って進めないとかさ。矛盾があったら解決しなきゃいけないっていう…ああ、そうか、そうなのかもしれないね。解決しなきゃいけないって思うから…

『俺っていうのは俺なんだっていうのに、それ以上の意味はない』という言葉の繰り返しの中で、彼は何を伝えようとしていたのか。

*

私たちは「自分は〇〇だ」という〇〇の部分に、さまざまな言葉を当てはめることができる。例えば私は

「大倉得史」という名前で、「日本人」であり、「学生」であり、「心理学を学んで」おり、「どこそでアルバイトをして」おり、「将来何になるかまだはっきりしていない」にも関わらず、「今論文を書いて」おり、「優柔不断」などころがあって「酒好き」である…云々。ただ、こうした記述を積み重ねていっても私の全体には決して行き着かない。私はいつもこうした言葉の言外に「主体としての私」を感じている。

一方で私は「大倉得史」という名前や「日本人」だということ、「学生」だということを自分のものとして引き受けている。そうした言葉一つ一つは、社会的にある種の「意味」を付されており、私の欲望はそれを自分の「意味」として引き受けている。すなわち、「主体としての私」の周りに「大倉得史」や「日本人」や「学生」といった「意味」が、矛盾しない形で織り合わされ、言うなれば「主体としての私」の重石になっていることで、私は自分に安定感を感じ、「意味」があるということを感じ、それが自分の欲望に沿ったあり方だとも感じている。

けれど、そうした「主体としての私」と「意味」との連結に何らかの必然性があるかと言えば、必ずしもそうではない。人は私のことを「大倉得史」と呼ぶかもしれない。けれど、そのことがただちに「主体としての私=大倉得史」であるということにはならない。私だって「大倉得史」という言葉で名指されているその者とは本当は何なのか、と訊かれたら困ってしまう。それはやはり「主体としての私」と呼ぶしかないようなものだが、それと「大倉得史」との連結を支え、必然性の感覚を生み出しているのは、「大倉得史でありたい」という私自身の欲望なのだ。

そして、須賀が一生懸命言葉にしようとしているのも、「主体としての自分」が「意味」を纏おうとするときにははまれる、そうした本源的な不確かさの感覚であるように見える。今の彼にはやりたいこと（欲望）が明確でなく、社会的「意味」がない。もちろん、「須賀」という名前や「日本人」だというあたりまでは問題ないだろうが、「学生」というあたりになるとかなり怪しくなってくる。というのも、彼は「学生」らしいことをしていないし、むしろそんなことをして何になるのかということをごそ問うているからだ。彼にとっては「学生」であるということが、「意味」と

して引き受けられない。彼という主体——欲望の主体——が「学生」の持つ「意味」を拒んでいる。

そんな具合に社会的「意味」の皮膜を引きはがされても、それでもなお残る「主体としての俺」。彼はその「主体としての俺」に一生懸命問いかけている——「お前は（自分は）誰なのか?」。そして、その度ごとに返ってくる「俺」という答え。「俺は俺だ」としか言いようがない。そこにそれ以上の「意味」はない。いや、もしかしたら「俺」が「俺」だということにも何の必然性もないのかもしれない。固定的な意味によって縛ることのできない「俺」。「ふらふらした俺」。

彼が語っていたのは、そういうことだと考えられる。そして、こうした感覚に苦しめられながらも、やはりどこかに悠然とした大きな構えを残しつつ、彼はこの後留年を続けていくことになるのである。

*

以上事例1では、冒頭に述べたような「語り合い」の方法論に基づいて、須賀という一人の青年の独特のありようを描き出そうとしてきた。彼の苦しみ——アイデンティティ拡散の苦しみと言って良いだろう——が、一体どんなものであるのかについてはまだまだ言い足りないことがたくさんあるし、なぜ彼がこういった苦しみに陥ったのか、そしてそこをいかにして抜け出していくのかについては、本稿ではまったく触れていない。それは別の機会にゆずることにして、次に須賀とはとても対照的な川田との「語り合い」に向かうことにしよう。

【事例2】川田の場合

1) 川田との出会い

私が川田に「語り合い」を依頼したのは、須賀とほぼ同じ頃、私が4回生だった年の秋だった。彼はその頃まだ2回生で、私とのつき合いは2年ほどであった。彼ともやはりサークルで知り合ったのだが、須賀と同様私にとってはまったく気の置けない仲間だった。私のいたサークルには、一応上下関係のメリハリはあったのだが、同時に学年を問わず一緒に飲んだり、遊んだりするような雰囲気もあり、私も何人かの後輩と

は特に親しくさせてもらっていた。彼もそうした後輩の一人だった。

川田の性格というのは、一言で言えば「素朴」であろうか、須賀の「大きさ」とはまた違った仕方で、人の気持ちをほっとさせるようなところ、どこか憎めないところが彼にはあった。まったく飾ったところ、気負ったところがなく、意見を求めれば大変素直に思っているところを返してくれる正直さ、年上の者に対して一応の礼儀は踏まえつつ、相手が年上だからといって変に身構えたりすることのない率直さが、後輩たちの中でも特に彼が上回生にかわいがられていた理由だろう。彼もまたそんな上回生たちとのつき合いにある種の居心地の良さを感じていたのか、同回生や後輩よりもむしろ先輩たちと仲良くするようなどころがあった。また、少し舌足らずの、地方なまりの話し方が、そうした彼の性格を一層引き立たせていたのかもしれない。

前にも述べたように、私のいたサークルには「授業ブッチ」の風潮があって、彼もまたご多分にもれず勉学に励んでいるとは決して言えない日々を送っていた。もちろん私とのつき合いが深まっていったのも、そうした遊びを通してである。ただ彼には、須賀と違って試験前には集中して勉強し必要単位だけはそろえていくという堅実さ、それができるだけ意志の強さがあった。遊ぶときには思いきりハメをはずして遊ぶが、やるべきことだけはきちんとこなしていく、それが彼の印象だった。

私が彼に「語り合い」を依頼したのは、まず何よりも彼とならば話しやすいということが一番だった。須賀もそんな存在だったのだが、私にとって「語り合い」という当時まだまだまったく未知だった方法が成立するか否かは、二人きりで話していてもそれほど妙な雰囲気や漂わないことが前提条件であると思えたのである⁽³⁾。そして、その点においては、川田は須賀と同じく絶好の協力者になってくれるのではと期待できる存在だった。彼もまた持ち前の人なつこさや他者に対する基本的な好意、そして私との日頃からの信頼関係があったからだろう、調査協力依頼を「はあ、いいですよ」といった形で引き受けてくれた。こうして川田との「語り合い」が始まった。

2) 彼の来歴

川田については、彼が歩んできた道のりから始めることにしよう。

*

彼もまた地方の平均的な家庭で生まれ育った。父親が厳しく、『親をばかにするな』という雰囲気の家だったという。小学校低学年のときは『結構明るくて、活発だったけど、いじめられていた』という。もちろん、今思えば『そんな大したことではなくて、からかわれていただけだと思うけど、まあ結構よく泣いていた』。5年生になってクラスが変わり、いじめっ子と違うクラスになってからはそんなこともなくなった。父親が公務員でその官舎に住んでおり、1年生から6年生まで仲良く遊ぶような近所の友達仲間の間で、基本的には楽しく過ごしていたようだ。

私立中学に進学後も、男子校の『ばかまるだし』の雰囲気の中で、『本当に楽しかった』という。部活動に一生懸命打ち込むと同時に、勉強の方もコツコツと陰ながら努力していたようだ。その部活の仲間の中に、一人皆と『ばか』をやらずに、『こびるといふか』『世の中をうまく渡っていきそうな』奴がいた。その子のことが嫌いで、またその子が勉強できたこともあって、『こいつには負けまい』と思って勉強したという。

高校に入るときにちょっとしたエピソードがある。通っていた中学校は『あまり大したことない』学校で、彼は進学塾に行っていた。そこの塾の先生の薦めで、彼はそのとき通っていた私立中学の付属の高校ではなく、県下でもトップランクの難関高校に進学を希望した。ところが、親はそれに猛反対し『お前、もう絶対そのまま（付属の高校に）上がれ』『上がらないかん』と言って一步も引かなかったのだという。彼は『もう大泣き』したのだが、結局そのまま付属の高校に進学することになった。ただ、そのことを今自分の中でどう思っているのかという質問に対しては、『今はまあ、今の大学通ったし、あえてリスクを冒さないで良かったな』と答えている。

付属の高校に入ってから、自分より勉強のできる人がたくさんいて、『まあ、そいつらに負けまいと思

って勉強した』。部活に入ることもあきらめ勉強に専念しようとしたのだが、結局は一浪することになってしまう。この点に関してだけは、今から思えば、どうせ一浪するぐらいなら部活をやっておけば良かったと少し後悔の念を見せる。

受験勉強は本当に『もうしんどかった』し、『ああ、もうどうなるんやろ』と精神的にも『行き詰まったものがあつた』という。けれども、『自分が、こう、何したいっていうのが分からんうちに狭めたく、可能性を少なくさせたくなかった』のと、仲間に負けたくないという思いで、『胃が痛く』なるほどがんばり、今の大学に合格することができた。『そんな苦しみを味わわないで楽々と通ってきた奴よりかは、精神的には強くなっている』とは思いますが、一方では自分はまだまだ精神的に弱いのだと彼は言う。将来は大学院に進学した後、研究を活かせるような職に就きたいと思っているという。

*

以上のように、彼が語るこれまでの道のりは、高校時代に部活をあきらめてしまった後悔がある以外は、あとは概ねかなり自己肯定的に捉えられていた。彼もまた浪人時代には大いに苦しんだようだったが、それは私や須賀の苦しみ方とは根本的に異質であるようだった。すなわち、私や須賀が『何のために勉強し、何のために大学に入るのか（入ってきたのか）』というところで思い悩んでいた（例え、それがどこか勉強からの現実逃避だったにせよ）のとは対照的に、川田にとってはあくまで勉強が『しんどかった』ようなのである。そして、そんな「しんどさ」を生み出すのは、学歴社会の悪しき風潮だったというよりは、むしろ自分が精神的に弱かったということそれ自体であると捉えられている。

また、彼においては父親の影というのが極めて色濃く匂っている。須賀の「何も言わない親」とは対照的に、川田の父親というのは自分の主張を息子に自信を持って呈示できるような人だったようだ⁽⁴⁾。高校入学の際のエピソードからもそれは窺える。また、彼は大学に入るのには可能性を狭めないためだという主張を（私とのかなり激しい議論の末にも）⁽⁵⁾ 決してゆず

らなかったのだが、実はそこにも親の考え方というのが大きく影響しているらしい。そして、実際彼は狭まらなかった「可能性」としての研究職に、将来は就こうと考えている。浪人時代親が示してくれた『いい大学、いい企業』という「可能性」に、完全に幻滅してしまった須賀と違って、川田においては大学入学後も「可能性」は「可能性」として生き延びたのだと言えるのかもしれない。

そんな川田の語りを聞いているとき、正直私は、一浪して受験勉強に苦しんできたという点では、ある程度同じ道を歩んできながらも、自分とまったく異なるものの捉え方をする彼のことが、「よく分からない」という感じにしばしば捕らわれた。以下では、そんな彼との「語り合い」を考察しつつ、彼という存在者の独特のありようを描き出していきたい。

3) 「語り合い」のぎこちなさ

彼との初回の「語り合い」は、須賀の場合のようにまくは運ばなかった。私の質問に彼は一生懸命答えてくれはするのだが、「質問 - 答え」という一問一答形式で会話が終始してしまっただけである。考えてみれば、アイデンティティの調査ということ伝え、思いついたことを話してほしいという漠然とした教示を与えただけで、『俺がどうしてこんな人間になったかということ?』と自ら切り出してくれた須賀の場合の方が、ある意味出来すぎている。「語り合い」がいかなる方法なのかは、恐らく実際に何回かやっていく中で初めて分かってもらえるという側面があるにしても、私はもう少し丁寧な導入の仕方が必要であると考えた。

そこで二回目の「語り合い」では、私はまず彼にアイデンティティの問いがいかなるものなのか見当をつけてもらうために、『自我同一性研究の展望 I』（鎌・山本・宮下、同上）より適当な箇所を読んでもらった。その直後の会話が以下である。

語り4 川田(2回生 秋)～別にない～

私 そこに書いてあるけど、自分は何のために生きていると思う？ あるいは、何のために生まれてきたかとか考えたことない？
川田 別にない。難しい質問だから。
私 まあ、難しい質問だけど、青年期というのはこういう問題を考える時期かなと思っ

ただけど・・・(中略)・・・そうか、「ない」か。そうしたら、今まで自分はこれについて一番悩んだとかいうものはある？

川田 思い当たらない。

(話が少し流れて)

私 何か今、じゃあ、これはやってみてみたいなのというのがある？

川田 今？

私 今っていうか、こう、自分が生きていく中で、「こういうことはやってみてみたいな」という・・・。

川田 ううん・・・今別にない。

私 ああ、今別にこれと言って？

川田 休憩・・・休憩みたいなもん・・・。

私 休憩？ 今が？

川田 高校までは、受験勉強ってもんがあったから、それはみんなが持つてるものじゃないですか・・・だから、それをそういうもん(やるべきもの)としてきたけど、まあ別に今はない・・・。

私 ふうん・・・まあ、受験勉強、与えられたものとして「これ、やらなあかん」と、やってきて、まあ受験勉強もとりあえず終わったやん、そしたら、とりあえず、「何がしたいか探そう」とかそういう気持ちはある？

川田 ... (首をかきあげる)

私 あ、別に？ ふうん・・・。

川田 まあ、だからそういうのは・・・まあ、次にあるそういう大きなもんと言ったら、あれでしょ、「自分がどんな研究室に入っていくか」って感じと思うけど、多分・・・まあ、そういうのは、別に今はないから・・・。

私 研究室の選択を迫られるまでは「ぼうっとしておこう」と感じ？

川田 かな？・・・まあ、分からないですけどね・・・。

私 分からないというのは？

川田 今は多分そう、そう思うけど、まあそれまでにまた、やりたいことが出てくるかもしれないですね・・・。

私 なるほどね・・・そしたらさ、例えば川田の中で今の時期の、なんて言うの、位置づけていうか・・・今は何をすべきとき？

川田 今ですか？・・・まあ、今は遊ぶとき・・・遊ぶときって言っても大して遊んでないけど・・・とりあえずまあ、暇なうちやし・・・。

私 暇なうちやしね・・・。あまり自分の中で、そ

ういう、なんて言うんだろう、人生の問題とか、例えば「明日自分がどうなっているのか」とか、難しい問題？を考えないようにしてるっていうところはある？

川田 …別にそう、そういうふうには考えてないけど…。

私 考えないようにしてるっていうか…。

川田 (私の話をさえぎるように) 考えないようにしてないけど、「考えないようにしてる」っていうか考えてないんやけど…考えてないことに対して、別に「考えないようにしてる」っていうわけでもない…。

私 ああ、そう…。

川田 敢えて、敢えて考えないようにしてるわけじゃないけど、考えてません。

彼と語り合う前まで、私の中には「自分は何のために生きるのか？」という問いは誰も一度は持つものだろうという前提があった。その問いの答えが見つからず苦しむという須賀や私の体験ほどにまで深刻にはないにしても、少なくともふと自分に問いかけたぐらいのことは、誰にでもあるのではないかと考えていたのである。けれども、それは川田によってきっぱりと、しかも大変あっさりとして否定されてしまった。

「え、そんなはずは…」という動揺。確かに私の質問もあまりうまくはないのだが、それにしても、この場で今の自分の生活やこれまでの自分の生き方を振り返り、もう一度それがどんなものであったかを考えてみてほしいという私の意図が、川田によってとても簡単に跳ね返されてしまう感じ。私の質問が彼に「入っていかない」し、彼もまた私との「語り合い」に須賀のように乗ってこない感じ。アイデンティティ問題(と私が考えていたもの)を彼に何とか導入し、彼のアイデンティティ体験を聞いてみたいという思いから、会話の前に文章を読んでもらったのだが、それも『難しい質問』という言葉で片づけられてしまった。つまり彼にとっては、どうもそれらは大変縁遠いもの、はっきり言ってしまうとどうでもいいものであるらしかった。

ただ「自分は何のために生きているのか？」といった問いや、そうでなくともそれに類する問いを考えたことすらない人などいるものだろうか。私は須賀と川田の他にも3人の協力者と「語り合い」をしていたが、

少なくとも皆その問いについて考える下地のようなものはあったように感じられた。普段はあまり考えない問いであることは確かだとしても、私との「語り合い」に際して、あえて考えてみようという姿勢だけは見せてくれたのである。だから、それと対照的なここでの川田の語りは、私の中に一つの違和感を生じさせた。

あまりに強く、きっぱりと考えないと言い切る彼の言葉は、実は「考えないようにしている」という意味なのではないかと私には思えたし、実際そういう方向でしつこく質問している。そのしつこさに彼は少しいらだったのかもしれない、私の言葉をさえぎって『考えないようにしているわけじゃないけど、考えてません』と少し怒ったように念を押した。

須賀と私との間では当初からそこにあり、二人が共にその上で語り合っていた「土俵」が、彼との間には決して作り得ないという感じ。恐らくは、私がどんな方法でもって彼をアイデンティティ問題(だと私が思っていたもの)へと導こうとしても、それが失敗に終わりそうな直感のようなものが私の中に生じてきていた。

4) 川田の強さ

それでもしばらくは、私は自分が質問しすぎるのが悪いのではないかなどと思って、わざと沈黙を続けたりもしてみた。他の協力者の場合、それが直前の自分の発言に対して「本当にこの言い方で良いのかな？」といった思考の揺れを引き起こし、さらに話が展開していくこともあったからである。けれども、彼の場合は、そうやって自分に向かって問いかけるというよりは、むしろ私に向かって問いを発したり、自分はこう思うという主張を繰り返したりする傾向が強かったと言える。彼とのそうした「語り合い」は、やはり何か私が思い描くアイデンティティをめぐる「語り合い」とは別種のものであったのである。

彼は『厚みのある人間』『人のことを考えられる人間』になりたいと言った。そして今の自分自身は『まだまだ成長していくべき点がたくさんある人間』だとも言った。どういった形で成長し、厚みを増していくのかという問いに対しては、『経験』を積むことだと答えた。ともかく、今の自分には圧倒的に経験が足り

ない。生きていく中で生じてくるさまざまな出来事に対処するうちに、そうした経験を積み、自然と厚みが増していく、そんなイメージを持っているようだった。だから、今取り立てて何かを決断したり、がんばって努力したりする必要に迫られているわけではなく、日々着実に『コツコツ』とやっているような感じなのだという。それは、今何かを決断し、今何者かに（ほぼ理想形に近い姿で）なってしまおうとする須賀とは正反対の態度だった。

将来のことについては、漠然と研究職ということを使い描いているぐらいで、あとはどこの研究室に入ろうかとのんびり考えているような状態だった。それについては、彼がまだ2回生だったということが大きいのもかもしれない。ただ、再び私の体験を引き合いに出せば、これからどうなっていくのだろうという不安は、浪人時代ほどではなかったにせよ、大学時代に常に気分の底に鬱積していた。彼の場合、たまに夜眠れないとき『これから将来どうなるんやろ』と思うことはあるらしいが、それでも一晩寝たら忘れてしまうのだという。そうした不安が生じてくるのはどうしてだろうという質問に対しては、『仕方ないことだと思うんですけどね』と、やはりどこかあっさりした答えでかわすのだった。

そんな彼と話していると、元来心配性で強迫的な傾向のある私も、一体何をそんなに「悩む」や、「苦しむ」などと言っているのかが分からなくなり、不思議と楽観的になってしまうことが多かった。私の思い描くアイデンティティ体験の持つ陰鬱さ、須賀のときには逆にどんどん喚起されてきた閉塞感は、川田との「語り合い」の中には影も形もなかった。

『コツコツ』とやる自分について彼は言った。『僕の考えはそんな急にやっても身に付かないし、もしそのこと（困難なこと）がまたふりかかっても、どう言えがいいのかな、それを一気にやるということで、乗り越えられないと思ってたから。それに、何となく、一気にやる苦しみより、毎日ちよつとずつ分散して苦しんだ方が、僕はなんか良かった。良かったというか、一気にやる苦しみに耐えきれなかったから。耐えきれずに仕方なしにそうなったのかもしれない』。そんなとても堅実な考え方と、実際にそれを実行できるだけの意志の強さ、そして確実に目標を達成していけるだ

けの能力とを、彼は併せ持っていたのである。

5) 川田と私の相逢

勉強しなければならないという規範に従い、周りの友達に『負けまい』と思って努力し、大学に入学。それなりに遊び、それなりに単位をそろえながら淡々と大学生を送り、やがては研究職に就いていく。彼はそれで十分満足しているようだった。正直私から見れば、それこそ『レール』に乗せられているようにも見える彼なのだが、彼はそれをきっぱりと否定した——『やらされているという感覚は、僕にはない』。例えそう思っていたとしても一旦それを保留して、せめて気づかぬうちに『レール』に乗せられている可能性だけは吟味してもらいたいと、私はその点についてはさまざまな話題を通してずいぶん突っ込んだのだが、やはり私の意図が彼に「入っていく」ことは決してなかった。

学歴社会はいけないと思うし、下の者を踏み台にしたり、上の者に『こびる』ような生き方だけは絶対したくはないという彼だったが、ある程度の競争や、自分が「一流大学」を経てある程度人の上に立つことになるだろうということは『仕方ない』とも言った。須賀との「語り合い」と同じように、話を社会だとか資本主義だとかいったやや抽象的なレベルに持っていかうとすると、『そんなこと僕には分からない』を繰り返した。そんな抽象的で難しい問題を、こんな場で私などと話していても仕方ないではないか、彼の根底にはそんな思いがいつもあったようだ。ともかく、すべての問題を自分の素朴な実感に引き寄せ、良いと思うものは良いと言い、悪いと思うものは悪いと言う、それが彼だった。私は、あまりに「正しい」彼の言葉を、いつも複雑な思いで聞いていた。

語り5 川田（3回生 秋）～可能性～

（職業選択の際考える可能性について。私はかつての自分の体験を思い起こしながら、弁護士、政治家、作家、スポーツ選手、国連職員、流浪の旅人、会社の社長、映画監督、俳優など、さまざまな可能性を考えたと言う。それに対して、彼はそんなことはあまり考えなかったと言う）

川田 それっていうのはでも、みんながちよつとは考えることじゃないんですか。

私 本気で考えた。

川田 かなり本気で考えたら、やっぱりそういうところ受けたりするんじゃないですか？ 俳優学校とか行ったりしたわけじゃないでしょう。別に大学入ってからでも劇団入って、こう、俳優になる道があったじゃないですか。それなのになんでそういうのを切り捨てたんですか？・・・〈中略〉・・・なんで、こう、自分の可能性も試さずに、こう、そういうのを切れたんですか？

私 逆に言えば俺の場合そういう可能性が多すぎちゃったんだよ。そんな中から一つに選ぶっていう作業がすごいしんどいことで・・・。

川田 ああ。でも本気で考えたわけじゃないと思いますよ。ほんまに俳優になるうって思ってたっていうのは考えられないと思いますわ。

私 なるうと思ったらそれはもう可能性じゃなくて、実際の行為やんか。俺が言ってるのは可能性。

川田 それはだって結局みんなが考えるところじゃないですか？ スポーツ選手とか。そういうのってやっぱ小学生のなりたいものの上位に来るものでしょう。

私 だから小学生として考えたんじゃない。小学生みたいに、その、非現実的なあれじゃなくて、そういう意味では、そういう意味では浪人のときに考えたから、非常に現実的な考えだったんだよ。

川田 ああそうなんですか。

私 ただ頭の中でやってるだけっていうのでは、非現実的な可能性であった。

川田 でもそれを行動に起こしたわけじゃないんでしょ？

私 うん。

川田 だったら一緒じゃないんですかね？

私 …うん。

私が浪人時代に考えた「可能性」。それは彼も言う通り、実際の行動には結びつかない非現実的な「可能性」だった。けれども、それが小学生のときに夢見るような、まったくと言っていいほど現実感のない「可能性」と同じものだったかと言えば、何か違うのではないかという思いが私を捕らえていた。私はあの頃実際に「大人」として、自分が何になるべきなのかをずっと考えていた。それにも関わらず、今彼と同じように大学に入ってきて、漠然と研究職を目指している自

分に気づくとき、あの「可能性」はやはり「夢」にすぎなかったような気もする。

あの『大草原のまん中』は、とても不思議な時空だったと言って良い。自分は現実的な方向を模索しつつあれこれ考えているつもりなのに、それこそ『方向だけがぐるぐる回って』、『てんで進まない』。進まないがゆえに、実際何をしたかと問われれば、何もしていないと言うしかない。少なくとも「考えていた」とは、言えるのだろうか。いや、今自分が向かっている方向性が、その頃まったく想像だにできなかったものであることを踏まえて言うと、むしろ彼も言うように「本気で」考えていたわけではないような気もする。けれど、やはりあの頃の自分は決して小学生ではなく、これから「大人」になろうとする者として「考えていた」のだと、そしてそれがどこかで今の自分の糧になっていると言いたい。

川田には、そのような体験は「分からない」ものだったのだろう。そんなものは非現実的だという彼の主張にも、確かに一理ある。そして、恐らくそんな現実とも非現実ともつかない「可能性」を、きっぱりと「夢」にすぎないと言ってしまえるということ、それが彼の強さなのだ。須賀の思考は、生活するためには触れてはならない規範や倫理をも相対化するほどの勢いを持っていたが、逆に川田はその「生活」という次元から決して遊離せず、いつも現実的で、いつも着実であった。もちろん、彼に夢や希望がないわけでもない。彼は「研究職」にそれを見ている。

そしてさらには、やはり彼は彼なりに色々な出来事に出会う中で、これからの人生の貴重な糧となるような経験も重ねているようだった。実際彼はほぼ順調に大学院に進学していったのだが、そんな彼からは一度も困難をくぐり抜けたことのない「ひ弱さ」よりは、むしろこれから先も持ち前の堅実さでもって力強く、さまざまな問題に対処していきそうな印象を受けたのである⁽⁶⁾。

総合考察

本稿では2人の対照的な青年のありようを描き出し

てきた。彼らの決定的な印象の違いは一体何によるものなのだろうか。

川田の特徴は、自己イメージや信頼を置くべき価値・規範が決して揺らがないところにあると言えるだろう。「自分」とは何であるのか、どんな価値・規範を信頼したら良いのかを問うていた須賀とは対照的に、川田のすべての発言は、彼の自己イメージや価値・規範に基づいてなされている。アイデンティティの問題とは、これらを「問う」ところに開けてくるものであるから、そこに「基づく」以上のことをしようとしない川田との「語り合い」が、何かごちなかつたのだと考えられる。

須賀の事例で見たように、自分がどんな価値・規範を信頼するかということと、自分がどんな人間であり、どんな生き方をするかということは、不可分の問題である。そこには、世界や社会をどう捉えるか、人生をどう捉えるかという世界観・人生観なども絡んでいる。主体はこれらに基づいて固有の「世界」を構成し、その中に「意味」ある形で自己イメージを位置づけることで初めて、自らを「自分」として把握できるのだと考えられる。したがって、価値・規範や世界観・人生観、及びそれらに基づいて構成される「世界」・自己イメージの総体を〈自己-世界体系〉と呼ぶことにしよう⁽⁷⁾。主体はこの〈自己-世界体系〉を暗黙のうちに参照しながら、「自分」を捉えているのだと考えられる。

「暗黙のうちに」というのは、私たちはいつもすでに自分固有の〈自己-世界体系〉を有しているにも関わらず、それがなかなか意識化されないということである。私たちは普段何か判断を下さねばならないことが生じたとき、ほとんど非意識的にこの〈自己-世界体系〉を参照しつつ「自分」なりの判断を下している。しかし、そういう判断を下した理由、そしてその理由の理由、その理由の理由の理由…を問うていくとキリがない。つまり、その判断の根拠となる〈自己-世界体系〉の総体は決して完全には意識化・対象化され得ないものなのである。

須賀においてはこの〈自己-世界体系〉が揺らいでいると言える。彼は何を信じたら良いのか、どういった生き方をすべきかを見失う一方、「自分」というものが固定せず、「ふらふら」しているという感覚に苦

しめられていた。これは暗黙の参照項としての〈自己-世界体系〉が揺らいでいるために、一貫した「自分」の把握ができないためだと考えられる。そして、それは大変不安な感覚を生じさせ、彼を苦しめている。彼はそんな苦しみを何とかしようと、いかなる〈自己-世界体系〉を持つべきかを問い、これを修正し、安定させようとしているのである。

ところが、上にも述べたように〈自己-世界体系〉の総体は、それとしてはなかなか捉え切れない。むしろそれを「問う」ことは、究極的には「生きるとは何か」「世界とは何か」といったほとんど解答不能の問題へと行き着き得る。須賀の場合、「問う」ことによって、逆にあらゆる価値・規範が相対化したり、より難しい問題が生じたりして、〈自己-世界体系〉はさらに混乱していつているように思われるのである。

逆に川田において徹底しているのは、この〈自己-世界体系〉を決して問わないことで、「自分」を捉えるための拠り所、何らかの決定の際の判断基準としてのそれを堅持しようとする態度、そこに「基づく」以上のことをしない態度である。問題が難しくなってきたときの彼の『分からない』という言葉や、そもそも普段はそんな問題を『考えない』というあり方は、非意識的な一種の「防衛」であると言えるだろう。

〈自己-世界体系〉をめぐる二つの態度——須賀の「問う」態度と、川田の「基づく」態度。彼らの印象の相違の本質はそこにあると考えられるが、それは一体何によるのだろうか。鍵となるのは『いい大学、いい企業』という『レール』に不満を感じた須賀と、現状に満足している川田の「欲望」のあり方だろう。二人とも大学に入って新たな価値観に出会ったり、環境の変化があったりして、自分の世界が広がったのは確かだろう。けれども、そこに分岐が起こる。すなわち、須賀の欲望がそうした世界の広がりに対し、何らかの修正を受けるべきあり方をしていたのに対し、川田の欲望は今までのあり方を変えずともやっていけるようなあり方をしていたのではないだろうか。今の「自分」に概ね満足しているという事情が、川田が〈自己-世界体系〉を問わない最大の理由だと思われる。逆にそうした態度が徹底していて、彼の〈自己-世界体系〉が揺らがないがゆえに、彼は今の状態に自足して

いるのである。

ただ注意が必要なのは、このように言う川田がいかに楽に日々の生活を送っているように聞こえてしまう点である。そうではない。例えば勉強がどんなにつらくても、「何のために？」に逃避することなく「勉強しなければ」にあくまで従い続けること、引いては〈自己-世界体系〉を守り抜くために『胃が痛く』なるまで努力し続けること、それはそれで大変なことである。かつての体験から、アイデンティティ拡散の苦しみにこそ共感していた調査者は、正直なところ頑なに自分のあり方を貫こうとする川田に、羨望とも反感ともつかない複雑な思いを抱いていたが、彼もまた彼なりの苦勞をしているのではないかということに気づいたとき、何となく彼のことが「分かる」ような気がしたのである。

ともあれ、以上のような考察は重要な問題を提起する。すなわち、須賀の「問う」態度の先に、ある程度の「基づく」態度が必要不可欠と思われる「アイデンティティ達成」という状態がどのように実現されていくのかという問題である。アイデンティティを探し求め、やがてそれに出会うという「問う-見つける」の直線的図式では捉えきれない、複雑なプロセスがそこにははさまれているのではないだろうか。残念ながらこの難問については、今は提起するだけに留めておくしかないだろう。

*

本研究は現代を生きる青年の生の実像を描き出し、「アイデンティティとはそもそも何なのか」という問題を考える上での手掛かりを得ようと努めてきたが、どちらの試みにも一定の成果は得られたと考える。

今回試みた「語り合い」という方法は、従来の「客観主義」の枠組みからすれば「主観的に過ぎる」ものかもしれない。しかし、方法論的自覚を持ちながら協力者の「主観」に積極的に踏み込んだことで、ある程度生き生きとした描写が可能になったのは確かだろう。「客観主義」の名のもとそうした成果を切り捨てるのはあまりに惜しい。未だ荒削りな「語り合い」の方法論については、別の機会に主観・客観とはどういうことかという根本的な次元からしっかり議論する必要が

あるだろう。

さらに、本稿で提出した〈自己-世界体系〉や、「問う」態度と「基づく」態度、欲望といった概念は、アイデンティティとは何なのかを解明していくための有効な作業概念となる可能性を持っていると思われる。今後さまざまな協力者のあり方を詳細に描写・考察し、アイデンティティとは何なのかをより深く考察していくことが課題となるだろう。

注

- 1 鎌・山本・宮下（1984）の説明によれば、マーシャのアイデンティティ・ステータスの主要4類型の諸特徴は次のようになる。まず達成型は自らの選択で、一定の職業やイデオロギーに積極的に関与している。かつて危機を経験したが、それも解決し行動している。環境が急変することがあっても、物事を処理していくだけの力を持ち合わせているように感じられる。これに対し、拡散型は危機の経験の有無でさらに二つの下位型に分けられる。危機前拡散型は、今まで自分が本当に何者かであった経験がないため、何者かである自分を想像することが困難である人たちである。危機後拡散型は、すべてのことが可能であるような状態にしがみつき、すべてを可能なままにしておかねばならない、しておこうとする人たちである。モラトリアム型は現在危機にあり、意志決定しようと模索している人たちである。また、予定アイデンティティ型は自分の目標と両親の目標との間に不協和がなく、すべての体験が幼児期以来の自分の信念を補強するだけになっている。ある種の「堅さ」（融通のきかなさ）が特徴的である。
- 2 「語り合い」法においては、調査者は超越的普遍的認識者の位置に立つのではなく、固有の体験、固有のものの見方、つまりは固有の主観性を有した一人の人間として協力者の前に現前する。事象の呈示に当たってもその主観性を覆い隠した形ではなく、むしろそれを積極的に表明していくことが目指されている。それを踏まえた上で、ここでは敢えて一人称の「私」で語ることにした。
- 3 現在では「語り合い」という方法が、友人以外の協力者に適用できるのかどうかを模索している。
- 4 本稿では、親のありようがその子どもにも与える影響というものを論じるだけの資料がそろっていないため、ここでは須賀と川田の事例にこうした相違点があるということを指摘するだけにとどめたい。
- 5 須賀の『ルール』批判に共感するようなものの見方を

する私にとっては、川田はまさに『レール』に乗せられているように感じられ、その点については彼とかなり激しい議論を交わしたのである。

- 6 すなわち、「両親の価値観が通用しないような状況下におかれ」ても、「たちまち途方に暮れる」こともなさそうな力強さで。
- 7 ここで持ち出した〈自己-世界体系〉という概念は、筆者が別のところで〈他の場〉と呼んだ概念の前駆態であった（大倉，2000）。

都筑 学 1994 自我同一性地位による時間的展望の差異～梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討 青年心理学研究，第6巻

(2001.6.6 受稿，2001.11.7 受理)

文 献

- 遠藤辰雄(編) 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- Erikson, E.H. 1950 仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会 第2版 みすず書房(1950 *Childhood and Society*. New York, Norton)
- Erikson, E.H. 1959 小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性 誠信書房(1959 *Identity and the Life Cycle*. Selected Papers. In *Psychological Issues*. Vol.1. New York, International Universities Press.)
- Erikson, E.H. 1968 岩瀬庸理(訳) 1969 主体性～青年と危機 北望社(1968 *Identity: Youth and Crisis*. New York, Norton)
- 一丸藤太郎 1975 自我同一性混乱の臨床像に関する一考察～臨床心理学的観点からみた青年期の諸問題(第三報) 広島大学教育学部紀要, **24**, 181-191.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 第**35**巻, 第3号, 253-258.
- 大倉得史 2000 「アイデンティティ」再考(修士論文, 未公表) 京都大学大学院人間・環境学研究科所蔵
- Rasmussen, J.E. 1964 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- 砂田良一 1979 自己像との関係から見た自我同一性 教育心理学研究, 第**27**巻, 第3号, 215-220.
- 鐘 幹八郎 1974 自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察 広島大学教育学部紀要, **23**, 329-342.
- 鐘 幹八郎・山本 力・宮下一博(共編) 1984 アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版
- 谷 冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 第**9**巻, 第1号, 35-44.